

近世の禅宗建築について

杉野 丞

一、はじめに

禅宗建築については、中国の五山禅院の伽藍、鎌倉・室町時代の五山禅院の伽藍と禅宗仏殿の遺構について論じられ、近世の禅宗建築についても大徳寺・妙心寺の伽藍と塔頭、永平寺と曹洞宗の建築等について論じられているが、地方寺院を含めた近世の禅宗建築の全体像については十分に論じられていない。そこで、ここでは中国の禅宗伽藍と我国の中世の禅宗建築を俯瞰しつつ、近世の禅宗建築について、全国の地方寺院の中から臨済宗本堂と曹洞宗本堂の遺構を取り上げ、それらの平面・構造・意匠と内部空間の発展過程を眺めてみたい。¹⁾

近世の禅宗建築について (杉野)

二、中国の五山禅院の伽藍建築の導入について

中国の禅宗は、隋代まで諸宗のように宗門としての基盤を築くことはなかったが、唐代に入ると慧能の南宗と神秀の北宗の二派に分かれ、南宗の禅を継承した五家七宗が勢力を伸ばし、宋代には長江下流域の浙江省を中心に隆盛を誇り、江南地方に禅宗の有力地盤を築くことになった。南宋の都、杭州はかつて呉越国の都で仏教の盛んな地域であり、西湖の南北と西の三方を山々が囲む山地として知られ、西湖の近くには靈隠寺、浄慈寺、杭州の西方の天目山麓には径山寺、東方の寧波近くには天童寺、阿育王寺等の五山禅院が開かれた。これに先立ち、寧宗皇帝代(一一九

四〇一二二四）に「五山の制」が定められると朝廷による五山の格付が行われ、十刹・甲刹（諸山）の寺院が置かれ、宗門は組織化されることになった。さらに、五山の制では「十方住持制」が採られたことで宗門の体制が確立し、江南地方から多くの高僧が輩出されたことで、長江下流域には十刹・甲刹等の諸寺が数多く設立された。そこで、中国五山の大禅院の伽藍を一瞥してみたい。

靈隱寺は、五山の二位とされ、西湖の西方の靈隱山にあり、谷を横断する中軸の前方を飛來峰、後方を北高峰とし、南宋末期の伽藍を描いた「大宋諸山図」（京都・東福寺蔵）によれば、境内前方に放生池が穿たれ、伽藍の中心軸線上に天王殿、仏殿、盧舍那殿、法堂、前方丈、方丈、座禅堂が一列に並び、法堂の向かって左右両脇に祖師堂、土地堂を設け、仏殿前の中庭の左右に輪蔵と鐘樓、仏殿の左右に僧堂、庫堂を配し、さらに僧堂の左奥に照堂、庫堂の右奥に衆寮、僧堂の左奥に東司を設けていた。

天童寺は、五山の三位とされ、浙江省寧波市の太白山の麓にあり、西晋代に創建され、寺地の移転を経て、南宋の建炎三年（一一二九）に宏智正覚が入寺すると千人を超え

る衆僧を抱える大寺になったとされる。前掲の「大宋諸山図」によれば、境内前方に放生池が穿たれ、伽藍の中心軸線上に前から天王殿、仏殿、穿光堂、大光明蔵、方丈が一列に並び、天王殿に向かって左と右に観音閣と鐘樓を置き、仏殿の両脇では左に僧堂、右に庫院を配し、僧堂の左奥に照堂、庫院の右奥に衆寮を置き、庫院の手前に涅槃堂、その右奥に東司を設けていた。このように、江南地方の五山禅院では共通の伽藍構成を備えていた。

三、鎌倉時代の禅院の伽藍について

我国の五山禅院は、鎌倉時代に中国の制に倣って創設されたが、当時は密教の影響を受けて純粹な禅宗伽藍を建立することは出来なかった。しかし、中国の禅僧の来日により本格的な清規と行事規範がもたらされると、江南地方の大禅院に見られる伽藍建築が建設されるようになった。そこで、鎌倉・京都における中世の五山禅院の伽藍を眺めてみたい。

明菴榮西（一一四一―一二一五）は、比叡山において台密を学んだ後、禅学の衰微を憂いて仁安三年（一一六八）、

文治三年（一一八七）の二度に亘り入宋し、黄竜派の虚庵懐敏から臨濟禪を学び、帰朝すると博多の聖福寺、京都の建仁寺を創立するなどして禅宗の普及に努めた。

建仁寺は、建仁二年（一二〇二）源頼家の庇護の下で東西により創立された京都五山の第三位の大禅院である。当寺は、荣西が宋代の百丈山に倣って建てたとされ、中国江南地方の大禅院に近いものであったと考えられている。しかし、鎌倉時代初期には天台・真言宗の勢力が強く、禅院の中に真言、止観の二院を加え、円（天台）、密（真言）、禅の三宗兼学の道場とされた。その後、正嘉元年（一二五七）東福寺開山の円爾弁円が入寺すると禅院として興隆し、正元元年（一二五九）建長寺開山の蘭溪道隆が入寺すると宋風の禅の作法と規矩が本格的に導入され、建仁寺は十三世紀後半には南宋の禅宗の規範が厳格に行われ、兼学的な宗風が払拭されたとされる。建仁寺の初期の伽藍建築は明らかでないが、太田博太郎博士は南北朝時代の伽藍について、「建仁寺においては、その全盛期とみられる南北時代の図が残されており、（中略）この伽藍は三門、仏殿、法堂、方丈を中心に並び、回廊がこれを巡り、鐘樓・土地

近世の禅宗建築について（杉野）

堂・東蔵と鼓樓・祖師堂・西蔵がこれに接して相対し、西にはさらに僧堂・東司・衆寮を設け、東南には浴室がある。」とされた。³⁾すなわち、禅宗の主要堂宇を南北中軸線上に整え、真言院、止観院、三重塔などは伽藍の南東位置に従属的に配されており、伽藍の中核部は禅宗伽藍の形式に則つたものと考えられる。そうした中で、鎌倉五山の一位の建長寺が中国の禅僧である蘭溪道隆（一二一三〜七八）により建長三年（一二五二）に創建される。建長寺の伽藍は、元弘元年（一二三三）の「建長寺指図」により窺うことができ、本図によれば、南北中軸線上に南から総門、三門、中庭を挟んで仏殿、法堂を縦一列に並べ、その後には礼間、得月樓、客殿を置いている。さらに、総門と三門を結ぶ参道の東に浴室、西に僧堂（大徹堂）を相対させ、三門、庫院、僧堂、仏殿を結ぶように回廊を一巡させ、僧堂の北に衆寮を置き、仏殿の東西両脇には土地堂と祖師堂を設けていた。しかし、中世末の京都では五山の禅院が応仁の乱により伽藍を失い、室町幕府が滅亡して経済的な基礎を失うと本格的な伽藍を復興することは出来なかった。

一方の曹洞宗では道元（一二〇〇〜一五三）が貞応二年

(一一二二三) に入宋し、天童山において長翁如淨(一一六一二)〜(一二二七)の法を嗣ぎ、安貞二年(一二二八)に帰朝し、京都の建仁寺に一時止まったが、ひたすら座禅をすべきことを主張し、洛外の深草に閑居して興聖寺(現宇治市)を開創し、宋朝風の純粹禅の宣揚に努めたと云われる。鎌倉の禅の先駆者であった臨済宗の荣西や円爾(一二二〇〜二八〇)が天台宗・真言宗との協調をはかったのに対し、道元は旧仏教との兼修を退けたばかりでなく、国家権力との結びつきも避け、寛元元年(一二四三)に越前の志比庄に大仏寺を創建した。道元が大仏寺の伽藍を起工するにあたり、京都の建仁寺、東福寺の伽藍を承知していたと考えられ、大仏寺では純粹の禅宗伽藍を目指したであろう。大仏寺は四年後に永平寺と改名され、それ以後永平寺として本格的な曹洞宗伽藍が建設された。「永平開山道元禪師行状建擿記」(建擿記)によれば、「寛元二年(一二四四)二月越前志比庄に大佛寺法堂の起工、同年四月大佛寺立柱・翌日上棟、同年七月大佛寺開堂供養、同年九月法堂竣工・開堂法会、同年十一月僧堂上棟、寛元四年(一二四六)六月大佛寺を永平寺と改称、寛治二年(一二七六)十

一月道元禪師傘松峯を吉祥山に改称、建長元年(一二四九)一月道元禪師『吉祥山永平寺衆寮箴規』撰す、同二年(一二五〇)経蔵建立、同五年(一二五三)八月道元禪師示寂、同年道元禪師の祖堂承陽庵を建立、弘長二年(一二六二)三門・両廡を建立し、永平寺伽藍が大成する」とある。これらの経緯について、横山秀哉博士は大仏寺の旧跡は現在の永平寺より二〇町程山奥にあり、三〇〇坪程の山腹で伽藍造営の可能性は低く、瑩山紹瑾による「洞谷記」と合わせると、永平寺の環境は現在の地形の通りであり、永平寺は大仏寺創建当初より現地にあったとみられ、大仏寺跡には限られた土地に軒石、築庭の石組等が残るとされる。このように、草創期の永平寺においても、現在の寺地に法堂、僧堂、衆寮、庫院、山門、回廊などを備えた禅宗伽藍が建立されたとみられる。しかし、永平寺の禅宗伽藍は、五山叢林の伽藍と異なり、道元が伽藍の建設に山間地を選んだのは、越前の波多野義重による比志野の寄進を受けたことに加え、密教と権力から距離を置くとともに、中国五山の伽藍に観られる傾斜地を活用することにより、禅の伽藍観と自然の境地を一体化させることを目指したので

はなかるうか。しかも、道元は百丈以来の清規を尊崇し、辨道法、衆寮箴規、典座教訓、知事清規等を自ら撰しており、宋規の規範の遵守と求道のため宋式の伽藍建築を整えることが不可欠であったであろう。その後、京都五山の南禅寺、東福寺、天竜寺、相国寺等の大禅院において、室町幕府の支援により七堂伽藍が築かれてゆくが、応仁の乱により五山の禅院が伽藍を失うと幕府の衰退により復興は困難であった。それに反して、近世に入ると林下の大徳寺が戦国大名の庇護を受けたのに対し、妙心寺は各地の他宗の荒廃した寺院を復興して転宗・転派し、全国に数多くの末寺を開き、妙心寺派は近世臨濟宗の最大勢力となった。そして、近世の妙心寺の勢力拡大の背景には、中世末期に美濃地方より妙心派の開祖の関山慧玄（一二七七〜一三六〇）をはじめとする多くの高僧を輩出したことがあった。

四、美濃地方の妙心寺派の寺院について

美濃地方は、妙心寺派の寺院が全国的にも集中すること知られる。美濃の井深に隠棲していた関山慧玄は、暦応五年（一三四二）大徳寺の開祖宗峰妙超（一二八二〜一三

三七）の推挙を受け、花園上皇より室町院領であった仁和寺花園の離宮跡を寄進されると、ここに正法山妙心寺を開いた。以来、美濃と妙心寺との関わりは強く、関山の弟子筋の義天文承（一三九三〜一四六二）は愚溪寺、雲谷玄祥は汾陽寺を開き、義天は妙心寺八世となった。その弟子雪江宗深（一四〇八〜八六）は妙心寺九世となり、その門下から景川宗隆（一四二五〜一五〇〇）・悟溪宗頓（一四一六〜一五〇〇）・特芳禅傑（一四一八〜一五〇六）・東陽英朝（一四二七〜一五〇四）の四哲が輩出され、龍泉・東海・靈雲・聖沢の四派本庵をつくり、門派発展の礎を築いた。この四派と美濃との結び付きも強く、東海派の悟溪宗頓は美濃地方の妙心寺派の中心となった瑞龍寺を開き、雲谷玄承が開いた汾陽寺を中興し、その弟子仁濟宗如は瑞林寺を開いて悟溪を開山に招き、仁岫宗寿は南泉寺、玉浦宗眠は大智寺を開き、大圭紹琢は清泰寺の開山となつてゐる。また、聖沢派の東陽英朝は美濃の守護土岐氏の出身で大仙寺に入山して東光寺、正伝寺を開いている。このように、美濃地方には開祖関山慧玄以来、本山妙心寺に昇住或いは四派の法を嗣ぐ高僧によって創立された寺院が多く、

これらが中世末から近世初頭にかけて、全国各地に多くの末寺を開いた。こうして、近世における臨済禅の勢力は五山に代わって林下の妙心寺・大徳寺両派に移り、本山として本格的な七堂伽藍を整えられたのもこの二ヶ寺であった。

妙心寺では、本山の高僧が退院すると塔頭が設けられ四派本庵が成立した。これらの塔頭では客殿、庫裡、書院、玄関、山門等からなる寺院構成が形成され、妙心寺派の地方末寺が四本庵に属したことから、こうした塔頭の寺院構成が全国に広まったと考えられる。美濃地方の末寺は、境内の中央に客殿（本堂）を南面して構え、その前方に枯山水の中庭を広げ、周囲を築地塀で囲むことで中庭の独立性を確保し、客殿の東に南北に長く庫裡と書院を建て、客殿と庫裡とを廊下で結び、この廊下に玄関を設けている。寺へのアプローチは、境内入口に山門を設け、山門より二・三回折れ曲がり玄関に達するのが一般的である。これは、京都の妙心寺周囲の塔頭寺院に見られ、これらの境内では本山周りの露地から入り、山門を潜って延びる参道は鍵の手に折れて玄関に達するのを常としており、近世臨済宗の

地方寺院では他宗のように境内の中軸線上に主要伽藍を並べるとはせず、こうした京都の塔頭寺院の建築が地方末寺の寺院構成（境内配置）に大きな影響を与えたと考えられる。そこで、近世の禅宗建築について、全国の地方寺院の原形となった塔頭客殿を検討した上で、先ず臨済宗本堂を取り上げ、近世前期、中期、後期に分けてその発展過程を検討してみたい。

五、塔頭客殿について

塔頭は、本来本山の住持が退院すると隠居所として本山周辺に設けられ、高僧の下に修行僧が集まり、師が示寂すると弟子が墓守として法脈を継承して門派を形成した。中世初期の塔頭では、建物の外に高僧の墓である「卵塔」を祀ったが、次第に高僧の頂相である「画像」を客殿の中に祀るようになり、二列三室の六室構成の客殿（方丈）の後列中央の仏間に仏壇を設けて開山像の軸を掲げた。しかし、近世に入ると頂相が画像から「木像」に変わると仏間に真室が設けられ、曲景に鎮座した開山像（木像）が祀られると、塔頭客殿は開山祖師を祀る建物へと変化し、中に



写真1 泉福寺開山堂 内部

は開山塔院として独立した開山堂を設ける塔頭も現れた。⁽⁶⁾
こうした開山堂の成立過程の一端が、大分国東市の泉福寺開山堂（曹洞宗・寛永十三・一六三六）に見ることが出

来る。寺は永和元年（一三七五）大友氏の一族の田原氏能が無著妙融禪師を開山に招いて創立したが、天正九年（一五八一）に仏殿、開山堂を残して兵火に遭い、慶長十年（一六〇五）に中津藩主細川忠興により再興された。開山堂は桁行三間半、梁間三間、切妻造り、柿葺き、妻入りの建物で、総丸柱として頂部に三ツ斗を載せ、正面中央間に双折棧唐戸を吊っている。内部は一つ空間とされ、後方に箱型仏壇を造り、中央に開祖無著妙融禪師、その両脇に宗祖、高僧の頂相を祀り、特に中央の箱型仏壇内部に開山の卵塔を祀っている点が注目される（写真1・2）。

次に、五山禅院の塔頭客殿の発展過程を眺めてみよう。



写真2
泉福寺開山堂 卵塔

室町時代の遺構についてみると、現存最古の東福寺の童吟庵客殿（方丈）は、前面に吹き放しの広縁を通し、その奥に前後二列三室の六室を置いた方丈形式とし、六室の正側面では柱間に板戸二枚・障子一枚を入れるが、前列中央の「室中」では前面中央間に両開き棧唐戸、その両脇に蔀戸を吊り、内部は床を板間として室中背面を板壁とし、その中央に開山の頂相（画像）を掲げている。また、室中の両脇室では外側面に幣軸付両開き板扉を吊るなど、古式の客殿の技法を残している。室町時代には、塔頭客殿の方丈形式を基本とし、前列中央の室中では板間に畳廻り敷きとし、正面中央に双折棧唐戸を吊り、両脇の室境には竹の節欄間を入れて三室一連の天井を張り、後列中央の仏間では、内部に地覆・束・羽目板・框からなる通し仏壇を設けて中央に画像（頂相）を祀り、背後の眠蔵を設けるのが一般的な塔頭客殿の形態であった。江戸時代に入ると仏間の真室に開山の木像（頂相）を安置するものが現われ、仏間では正面三間の中央に高く内法長押を通し、中央と両脇間に箆欄間を入れ、下に襖引違い戸を入れて戸締りをした。なお、室中正面の双折棧唐戸は江戸時代を通して長く保た

れるが、江戸後期には正側面の広縁外に建具が嵌められ、広縁が内部空間として扱われるようになる。双折棧唐戸は姿を消して行く。

一方、本山の伽藍の中にも六室構成の方丈と呼ばれる建物があり、妙心寺には大方丈と小方丈が残され、これらも方丈形式とされる。また、中世後期には塔頭客殿の室名称が確認され、二列三室の前列中央を「室中」、その奥を「仏間」、室中の向かって右を「礼の間」、左を「檀那の間」、仏間の右を「書院」、左を「衣鉢の間」とした。また、賓客を招く檀那の間を「上間」、住職が日常の応接に使う礼の間を「下間」とも呼んだ。近世臨済宗本堂では、塔頭客殿と同様の「室中」と「仏間」の名称が用いられるが、その他の室名は定まっていない。

次に、禅宗寺院の地方末寺では、中世から方丈形式の客殿を中心施設とし、臨済宗・曹洞宗ともに客殿に本尊仏を祀り、近世には独立した寺院として本堂の機能が求められるようになる。客殿から本堂へ本格的な移行が行われ、臨済宗本堂と曹洞宗本堂を成立させた。そこで、近世の前期、中期、後期において、近世臨済宗本堂、近世曹洞宗本

堂がどのような発展過程を辿ったのか探ってみよう。

六、近世臨濟宗本堂について

(一) 近世前期 現存最古の遺構である慶長年間（二五九六～一六一五）の瑞巖寺本堂（宮城）と臨濟寺本堂（静岡）を取り挙げてみたい（図1）。両寺は伊達家と今川家の菩提寺として創立された名刹であり、規模は瑞巖寺が桁

行十八間、梁間十一間半、臨濟寺が桁行十一間半、梁間八間半と大きく、間取りは二列三室の六室の方丈形式を基本とし、正側三方に広縁を巡らし、前者では周囲の落縁外に建具を入れるが、後者では広縁外を開放し、室中では共に正面中央に双折棧唐戸を吊り、内部を板間に畳廻り敷きとし、仏間には背面の壁に沿って地覆・束・羽目板・框からなる通し仏壇を構え、その背後に「眠蔵」を設けており、

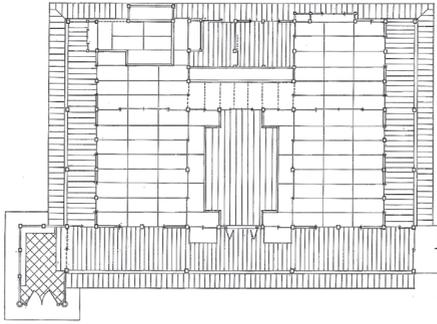


図1 臨濟寺本堂 復原平面図

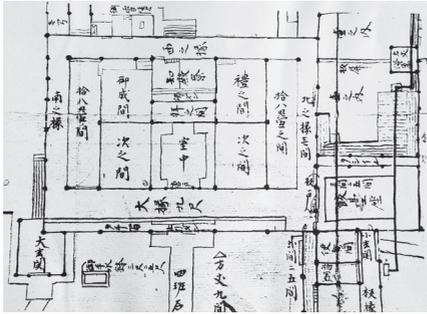


写真3 大安寺 古図

室境には襖、室と広縁境には遣戸二、障子一を入れて間仕切るなど、規模が違うものの京都の塔頭客殿を基本としている点で共通する。しかし、いずれも大名を外護者としたため、本堂正面（南面建ち）の西端に参詣のための玄関を付加し、室内では後列西端の室を「上段の間」としており、地方末寺との違いを見せている。また、越前松平氏の大安寺本堂（福井）、淡路蜂須賀家の家老稲田氏の江国寺本堂（兵庫）のように地方藩主の菩提寺にも中規模ながら見られ、本堂には玄関と床・棚・書院を備えた「御成間」が設けられている（写真3）。

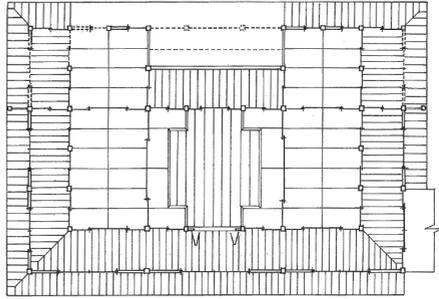


図2 定勝寺本堂 復原平面図

央の「室中」では板間に畳廻り敷きとし、室中と両脇間との境に竹の節欄間等を入れて三室に一面の竿縁天井を張り、「仏間」では背面の壁に沿って地覆・束・羽目板・框からなる通し仏壇を設け、六室の正側三方に広縁を巡らしている。しかも、長昌寺（復元）では広縁の外側柱間を吹き放し、室中正面中央に双折棧唐戸、その両脇に葺戸を入れるなど京都の塔頭客殿に見られる古風な手法を残している。

次に、地方領主により外護を受けた末寺の中から、慶長年間の定勝寺本堂（長野）（図2）、長昌寺本堂（山梨）を挙げてみると、両本堂は桁行九間半、梁間六間として二列三室の六室を構え、総角柱に敷鴨居を通し、室境に襖、周囲に遣戸・障子一を入れ、前列中

元和（貞享（一六一五〜八八）年間の遺構である片山寺本堂（三重）、臥竜寺本堂（愛知））についてみると、片山寺では桁行八間、梁間六間の方丈形式とし、後列中央の室部分では前半に奥行の浅い仏間を設け、後半に広い眠蔵を残しており、中世後期の京都の塔頭客殿に見られる古式を止めている。しかも、臥竜寺では、六室の後列中央の仏間において、前半を札拜の真前、後半を凸字型に張り出して真室とし、開山の頂相を安置している。この形式は、京都の大徳寺の寛文年間（一六六一〜七二）以降の塔頭客殿や妙心寺派の四本庵にも見られ、江戸時代前期に画像から木像の頂相へ転換した時期に成立したものであり、室町時代の塔頭客殿においてもこの時期に改修を加えて真室を設けた点が注目される。これは、臥竜寺が妙心寺派の中本山瑞泉寺の塔頭であったことに起因し、地方寺院においても中本山と塔頭の関係が成立していた。このように、近世臨済宗本堂は京都の塔頭客殿を原形に形成されたことが分かれている。他方、近世臨済宗本堂として塔頭と異なる一面を見せている。一つは仏間の仏壇形式であり、古式の幅半間の通し仏壇からその奥に幅半間通しの仏龕を設け、前面に三つ



写真4 龍潭寺本堂 室中



写真5 龍潭寺本堂 仏間

の花頭窓を開け、中央に本尊仏を安置し、両脇に開山の頂相と二世、三世等の住職の頂相あるいは位牌を安置しており、江国寺本堂（福井）、中山寺本堂（三重）、大仙寺本堂（岐阜）などに見ることが出来る。さらに、龍潭寺（静岡）では室中では板間に畳廻り敷きとし、両脇間境に竹の節欄間を入れて三室に棹縁天井を張る等、頭塔客殿の古式を遵守しつつ（写真4）、仏間では来迎柱・須弥壇を出現させている（写真5）。このような例は近世後期に現れる

の一般的なであり、臨濟宗本堂の中でも最も早い例となる。このように、臨濟宗本堂では仏間の変化に応じて古式の眠蔵が姿を消す傾向が現れているが、近世前期の古刹である大安寺本堂（福井）、長久寺本堂（長野）、普門寺本堂（大阪）等には眠蔵が残されている。

(二) 近世中期 元禄〜安永年間（一六八八〜一七八一）は、江戸幕府の体制が確立し、宗門でも本末制度と知行制度の下で安定的な発展を遂げたため、地方寺院において堂宇の造営が進み、全国に多くの近世臨濟宗本堂が建立されることになった。禅宗寺院の地方末寺をみると、前期と同様に塔頭客殿を原形とし、近世臨濟宗本堂として形態を整えてゆくが、前述のように末寺であっても寺号を持つため、独立した寺院として本尊仏を祀ることが求められ、仏間の仏壇形式に変化が現れている。

東海・甲信地方の臨濟宗本堂の遺構の中から、近世中期の本堂を八〇棟についてみると、四つの仏壇形式に分けられる。①通し仏壇（壇上の区分無し）…一三件、②通し仏壇、通し仏龕（仏龕前面に花頭窓三付）…三四件、③通し仏壇、丸柱・斗拱・虹梁を設置…一〇件、④来迎柱・須弥

壇…二二件、その他…一件となる。しかも、①の通し仏壇が中期前半に多く、④の来迎柱・須弥壇が中期後半に多くなることから、この時期は、本堂の仏壇形式が通し仏壇から来迎柱・須弥壇へと変化する移行期とみることが出来る。また、近世前期には前述のように権力者の菩提寺等では参詣のために玄関が設けられ、六室の後列向かって左端の上段の間に床の間・違い棚等を設けるものがあつたが、この時期にも伊達忠宗の九男前沢領主飯坂家の霊桃寺本堂（岩手）、涌谷伊達家の見龍寺本堂（宮城）、萩藩の初代藩主毛利秀就を祀る大照院本堂等に室礼を備えた御成の間が残されており、近世中期の臨濟宗寺院においても菩提寺としての伝統が継承されていることが分かる。

一方、近世臨濟宗本堂の中には、「方丈」と称するものがある。国泰寺方丈（富山）、天恩寺方丈（愛知）、永源寺方丈（滋賀）、清白寺方丈（山梨）等、これらの寺院には仏殿が残されるものが多く、本尊仏は仏殿に祀られるため、一般の地方末寺のように本尊を客殿（方丈）に安置する必要が無く、方丈としての機能を果たせば良かったのである。また、近世臨濟宗の地方寺院において仏殿を備える末寺は

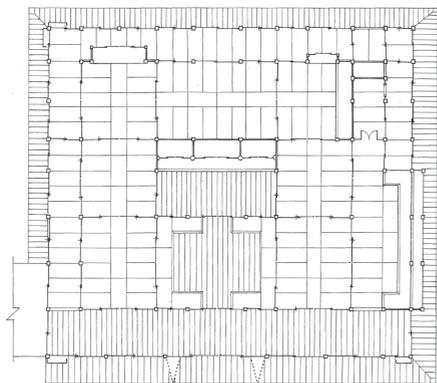


図3 正宗寺本堂 復原平面図

少なく、江戸時代に仏殿を残す寺院は旧五山派の末寺に見られる。しかも、中世末に妙心寺派に転派した寺院の中で、新たに仏殿を造営した例は管見では極めて少なく、近世の妙心寺派の地方寺院では中世に見られた仏殿と方丈（客殿）の寺院構成が減少し、客殿（本堂）に集約された原因が何処にあったのかについては今後の検討課題である。

(三) 近世後期 天明〜慶応年間（一七八一〜一八六八）

の遺構を眺めると、近世後期の大きな特徴は平面の拡張であることが分かる。空恵寺本堂（群馬）では六室の向かって右側に二室を加え、龍潭寺方丈（滋賀）では六室の両脇に鞘の間二

室を加え、光林寺本堂（東京）では六室の両側に二室、背面横長の鞘の間一室を加えるなど、二列三室の六室構成から二列四室、二列五室などの八室構成、一〇室構成の新たな平面が生み出されている。さらに、宝福寺方丈（岡山）では六室の正側三方の広縁を幅一間半に広げて鞘の間とし、六室の背面に横二室分の裏書院を加えており、萬寿寺本堂（大分）では六室の正側面に広縁を巡らし、六室の背面に横三室分の裏書院を設け、多福寺本堂（大分）、正宗寺本堂（愛知）（図3）では六室の正側面に広縁を通し、六室の背面に三室の裏書院を加えて九室構成としている。平林寺方丈（埼玉）は古図によれば、六室の正側面三方に広縁を巡らし、これらに畳を敷き詰めて室境の柱列に建具を入れて間仕切り、全体として五室三列の一五室構成としている。このように、近世臨済宗本堂は二列三室の六室から平面拡張が行われ、三列三室の九室構成、三列五室の一五室構成の平面形式へと発展している。

また、近世前期・中期までは、仏間の仏壇形式は通し仏壇、通し仏壇と通し仏龕とするものが主流であったが、後期には来迎柱・須弥壇を設けて本尊仏を安置するものが多

近世の禅宗建築について（杉野）

数を占めるようになった。但し、中世からの歴史を持つ中核寺院では伝統を重んじて古式の通し仏壇を用いる傾向を示した。また、近世前期・中期と同様、月桂寺本堂（大分）、華蔵寺本堂（岩手）、清見寺方丈（静岡）、江音寺本堂（長野）では玄関と御成りの間が備えられ、藩主・領主などの菩提寺本堂も引き続き建立されていることが分かる。この他、曹源寺仏殿（岡山）では六室の正側面三方に幅二間の鞘の間を巡らした方丈形式の平面としながら、外観は通常の単層、入母屋造とせず、単層、裳階付の仏殿形式の建物とするなど、新たな変化が現れている。

七、近世曹洞宗本堂について

(一) 近世前期 慶長年間（一五九六～一六一五）の革秀寺本堂（青森）（写真6）、長勝寺本堂（青森）は現存最古の曹洞宗本堂となる。革秀寺は弘前藩津軽家の菩提寺として弘前城下に創建され、長勝寺も弘前城築城に際して現地に移築され、同藩の僧録所に定められた名刹である。本堂の規模は、革秀寺が桁行九間、梁間七間強、長勝寺が桁行十一間半、梁間八間強と異なるが、両本堂は、外観・間取

り・内部意匠・建築技法において多くの共通点が認められる。間取りは、いずれも堂内前面に土間（露地）を通し、この奥に広縁（大縁）と二列四室の八室構成を構えている。柱は、面取角柱を用いて周囲の柱上には舟肘木を置き、一軒疎垂木・木舞打を見せており、当初の屋根は茅葺であった



写真6 革秀寺本堂

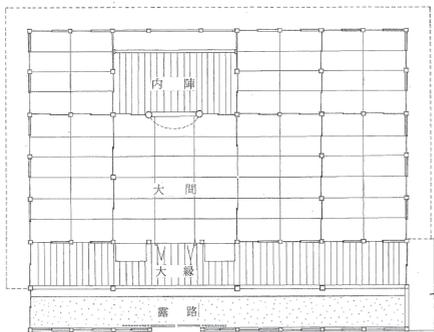


図4 革秀寺本堂 復原平面図

とみられる。内部は、土間と大縁の境に三本の太い角柱（入側柱）を立てて天井桁を支え、土間上部に化粧屋根裏、大縁上部に棹縁天井を張り、広い空間を生み出している。室部分は、八室構成の左寄りの六室部分を中心とするため、前列中央を「大間」、その奥を「内陣」と呼んでおり、その他では室名を定めなため、大間の右を「上の間」、左を「下の間」、各奥を「上奥の間」、「下奥の間」、

これらの右隣の二室を「次の間」、「次奥の間」と呼ぶこととする（仮称）。これらの室境では一間乃至一間半毎に面取角柱（内陣前面を除く）を立て、敷鴨居を通し、襖・板戸によって間仕切り、室部分の周囲には板戸二、障子一を入れて

おり、内法上には白漆喰壁を入れ、各室に棹縁天井を張っている。大間では、前面中央柱間（八尺間と呼ぶ）に双折棧唐戸を吊り、その両脇間に葎戸を吊り、柱上部には舟肘木を置いている。このように、曹洞宗本堂では、前述の近世臨済宗本堂と同様に塔頭客殿の二列三室の六室構成を基本とするが、その向かって右側に二室を加えた点、本堂の中心軸が平面、外観ともに左側に寄り、左右対象とならない点、堂内に「露地」と呼ばれる土間を通した点に大きな特徴がある（図4）。

さらに、堂内は臨済宗本堂では「室中」を板間に畳廻り敷きとして江戸後期まで塔頭客殿の伝統を踏襲したが、曹洞宗では慶長年間より「大間」を畳敷詰めとし、行事の際の導師・役僧の法式の空間とされた。また、臨済宗では室中と両脇間との境（内法上）に竹の節欄間を入れ、三室に一連の竿縁天井を張るものが多く見られたが、曹洞宗では大間両脇の室境に箴欄間・板欄間等を入れ、天井より小壁を下ろして三室を区分している。内陣では、慶長年間より前面に二本の丸柱を立て、中央間に虹梁を渡して開放し、柱上に斗拱を置いている。曹洞宗では、この丸柱を「露

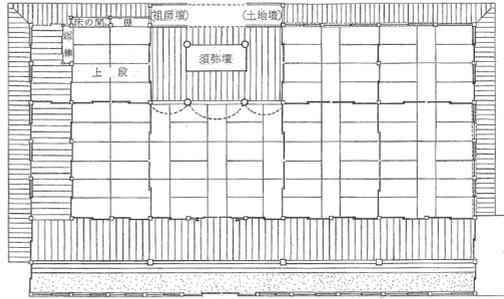


図5 広泰寺本堂 復原平面図

柱」と呼ぶが、露柱とは本来仏殿内部に立つ柱であり、二重屋根の下層の柱を指し、法式の際には役僧の立ち位置を定めたとされる。

このように、曹洞宗本堂は本尊仏を安置する「仏殿」と法式を執行する「法堂」の二つの機能をもつ建物に集約したものであることが分かる。内陣では、慶長年間には板の間とし

て奥の壁に沿って地覆・束・羽目板・框からなる通し仏壇（復元）を設けており、曹洞宗本堂も当初は京都の塔頭客殿に見られる仏壇形式を用いていた。しかも、近世前期から中期の曹洞宗本堂では、その大半が古記録・古図に「客殿」と記されるのが一般的であり、その原形が臨濟宗本堂

と同様に塔頭客殿にあったことが分かる。

次に、寛永〜貞享年間（一六二四〜八八）の東海・甲信地方を中心とする遺構を眺めると、大祥院本堂（愛知）、素玄寺本堂（岐阜）、長光寺本堂（埼玉）、東嶺寺本堂（石川）、慈照寺本堂（山梨）、龍溪院本堂（愛知）、仏光寺本堂（三重）、広泰寺本堂（三重）（図5）、広嚴院本堂（山梨）、実性院本堂（石川）、広沢寺本堂（長野）、釣月院本堂（静岡）、貞祥院本堂（長野）、安興寺本堂（静岡）、長興寺本堂（茨城）、天徳寺本堂（秋田）等が挙げられる。これらの寺院は各地の中核寺院であり、いずれも堂内前面に土間・大縁を通し、土間・大縁境に太い独立柱を立てて大桁を支え、土間に化粧屋根裏、大縁に棹縁天井を張り、この奥に二列四室の八室構成を構え、総角柱（内陣を除く）として敷鴨居・内法長押を通し、室境に襖や板戸を入れ、室の外周には板戸二、障子一を入れている。大間では、前面中央間に双折棧唐戸を入れ、内部を間口三間半、奥行三間の二十一畳とするものが一般的である。そこで、こうした本堂を前面土間八室型（仮称）呼ぶこととする。このように本堂が成立した背景には、宗門での規範が整え

られたことによるものとみられる。⁽⁷⁾

宗門の『相樹林清規』、『萬松山清規』、『江湖指南記』等によれば、大間での法式執行の際には導師と東西両班(都寺、監寺、維那、直歳、典座、副寺、首座、書記、知客、知殿、藏主、浴主)の役僧の座位が定められており、大間の広さは間口三間半、奥行三間の二十一畳とするのが一般的であり、行事・法式に深く関わっていたと考えられる。

上の間、下の間は大間の次室とされ、室内に座敷飾りは一切設けないが、『橋谷大洞指南』によれば、輪番制を採っていた遠江大洞院では入院後の披露の際には主賓を上奥の間に迎え、上の間は「禮間」として用いられた。また、上奥の間は「室中」(室間)と呼ばれ、禪門では重要法儀である師から弟子に伝法する部屋に充てられ、この室の背面に床、付書院等の座敷飾りが設けられたのは、こうした法儀が継承されたためであろう。なお、上の間と下の間は、一般の檀家が参集する際には優婆塞、優婆夷の席とされることもあった。

次に、内陣について見ると、寛永年間(一六二四〜四五)の大祥院本堂、素玄寺本堂、長光寺本堂では、前面に

近世の禪宗建築について(杉野)

は丸二本柱を立て、柱上に斗拱をおき、柱間に虹梁を渡し、内部には奥に通し仏壇(復元)を用いており、慶安(貞享年間(一六四八〜八))の遺構では、内陣の中央後方に來迎柱・須弥壇を設けるのが一般的となる。また、瑞龍寺法堂(富山)では高岡藩の前田家の菩提寺として古式に則って禪宗の七堂伽藍が建立された。法堂は桁行十四間、梁間十一間半と大きく、間取りは堂内前面に土間・大縁を通し、その奥では二列三室の六室構成とする(前面土間六室型と仮称する)。土間・大縁境に独立柱を四本立てて大桁を支え、土間に化粧屋根裏、大縁に棹縁天井を張っており、大間では正面中央柱間に双折棧唐戸を吊り、内陣では前面に二本の丸柱を立て柱間に虹梁を渡し、柱上に斗拱を置き、内部には背面の壁に通し仏壇を設けている。これは伽藍中央に本尊仏を祀る仏殿が建てられたため、一般の曹洞宗本堂のような來迎柱・須弥壇は必要とされなかった。しかも、法堂に前土間六室型を採用した点は、当初から南北中軸線上に総門、山門、仏殿、法堂を並べ、仏殿の東に庫裡、西に禅堂、衆寮を配し、仏殿を囲むように回廊を一巡させ、回廊により諸堂が結ばれている。このことは、法

堂の内部土間が回廊の役割を果たしたことを示し、近世曹洞宗本堂の土間（露地）は北陸地方の積雪に対応したものであるが、江戸時代には寒冷地以外の全国に普及しており、近世曹洞宗伽藍を構成する回廊の役割を果たす必要があつたことが分かる。

また、前述の前面土間八室型とした寺院の多くは、各地の中核寺院であり境内に曹洞宗伽藍を整えており、南北中軸線上に総門、山門、本堂を配し、本堂の東前方に庫裡、西前方に禅堂、衆寮等を設け、各堂宇を結ぶための回廊を一巡させている。これは、江戸時代の洞門では禅院の住持は最終最高の義務として一回以上の結制を行うことが求められ、住持が法幢を建て、首座その他の衆僧を統括し、結制安居中に授戒会、血脈会を行うこととされた。結制は九旬安居の制ともいわれ、四月十五日から七月十五日までを夏安居、十月十五日から翌年の一月十五日までを冬安居とし、共に九十日間禁足して修行を行った。そのため、宗門では江戸時代に結制をし得る回数をもつて寺院の格式を定めており、常恒会地は毎年夏冬二回の結制を執行し得る寺院、片法幢会地は毎年夏冬いずれか一回の結制を執行し得

る寺院、随意会地は三年から四年に一回の結制を執行する寺院、法地は住持が在任中に一回の結制を執行する寺院とされた。そのため、常恒会地、片法幢会地、随意会地等の寺院では、結制を行うために総門、山門、禅堂、衆寮、本堂、庫裡、東司等の諸堂を備える必要があつた。

(二) 近世中期 元禄〜安永年間（一六八八〜一七八一）の東海・甲信地方を中心とする曹洞宗本堂一六〇棟の平面形式を一覧すると、四つのタイプに分けられる。前述の前面土間八室型、前面土間六室型に加えて、新たに広縁八室型、広縁六室型が現れ、土間の無い本堂は宗門の伽藍を備えない中小規模のものが多くことが分かる。前面土間八室型…五〇棟（一七棟）、前面土間六室型…五〇棟（一一棟）、広縁八室型…五棟（二棟）、広縁六室型…五三棟（七棟）となり（一）内は東海・甲信地方以外の地域の遺構数）、これらの本堂の平面形式を所在地から分布図に描いてみると、前面土間八室型は信濃・甲斐地方の多く、駿河・遠江・伊豆地方にも分布している。この形式は、前期には各地の有力寺院に採用されていたため、地域的には分散するとみられたが、甲信地方では格式の各層に亘って採

用されており、この一帯では同形式が集中したとみられる。平面形式を広範囲に眺めると、前面土間六室型は尾張、三河、美濃、伊勢、南紀、遠江、信濃などの各地に分布しており、有力寺院の中にも採用するものがあつたが、土間をもつ中規模の本堂として採用され、各地に普及したものとみられ、広縁八室型は少なく、広縁六室型は、小規模の本堂であり全国各地に分布している。

この時期の前面土間八室型、前面土間六室型の本堂では土間・大縁境に独立柱を二本乃至三本を立て、大桁を支えて土間上部に化粧屋根裏、大縁上部に棹縁天井を張り、この空間を新たな架構の場に変えるものが現れている。すでに、近世前期より信濃地方で始まっていたが、近世中期には、(一)入側柱・繫虹梁方式、(二)大虹梁方式、(三)全面天井方式の三つの架構法が採用されている。(一)入側柱・繫虹梁方式は、入側柱で上部の大桁を支えるもので、これを繫虹梁で固め、中には入側柱の柱間に桁行の大虹梁を数挺渡すものもあり、構造的な安定と架構による意匠的な効果を狙つたものである(守芳院本堂(長野)、定津院本堂(長野)、興禅寺本堂(静岡)、福王寺本堂(静岡)、広禅寺本堂(三

近世の禅宗建築について(杉野)

重)、種月寺本堂(新潟)。(二)大虹梁方式は、入側柱をすべて除き、上部の荷重を大虹梁によって総て支え、広い空間を造ると同時に大虹梁による意匠的な効果を目指したものである(信綱寺本堂(長野)、龍雲寺本堂(長野)、清涼寺本堂(滋賀)、南明寺本堂(山梨))。(三)全面天井方式は、上部の荷重を天井裏の小屋梁により支え、入側柱・大虹梁等を一切用いない

もので、棹縁天井を一面に張って平明で広い空間を生み出している(光泰寺本堂(静岡)、龍洞院本堂(静岡)、明音寺本堂(長野)、永住寺本堂(愛知)、乾坤院本堂(愛知))。また、中には釣月院本堂(静岡)(写真7)のように入側柱を立て



写真7 釣月院本堂 大縁上部



写真8 永沢寺本堂 内陣正面

て繫虹梁を渡し、それらの間に大虹梁を渡すものもあり、架構を積極的に採用したものは遠江、駿河、信濃、甲斐地方に見られる。

本堂内部では、大間・内陣と開山堂・位牌の間に意匠と空間の発展が認められる。大間・内陣の発展は、前期に発生した仏堂化を押し進め、中期前半に前面土間八室型、前面六室型の大型本堂では大間・内陣に斗栱・格天井を用いるものが現れ、後半には両室を一層荘厳するものが増している。また、内陣では宝暦年間（一七五一〜六四）頃から来迎柱・須弥壇の背面に仏龕を出すものが現れ、以後全国に普及した。これは、曹洞宗では授戒会等に導師が須弥壇に登壇するため、本尊仏の移動が求められ、仏龕を設けて奥に本尊仏を後退させ、その前に幕を下ろして行事が行われるようになったとみられる。さらに、大間では中期末に永沢寺本堂（兵庫）（写真8）のように上の間と下の間の境に梁間三間程の大虹梁を渡し、室境を開放し三室を一連に扱うものが現れ、これまでの客殿風の意匠を大きく変えることになった。

内陣では、この時期には前面に丸柱二本を立て、柱上に



写真9 妙嚴寺本堂 旧開山堂

斗拱を置き、柱間に三スパンの虹梁を架け、内部では来迎柱・須弥壇を設け、背面では後門を開け、両脇に土地壇、祖师壇を設けて大権大師、達磨大師を祀り、内陣後方は、後門から奥に中央通路を延ばして位牌堂・開山堂を設けている。位牌堂では、中央通路を挟んで位牌壇を向かい合わせ、開山堂では、妙嚴寺旧本堂(愛知)のように、床を一段上げて畳敷きの一室とし、室背面に仏壇を設け、壇上には丸柱・斗拱・虹梁を用いて前面を飾り、中央に開山と宗祖の頂相、左右両脇に高僧の頂相を安置し、その両脇に歴代住職の位牌等を置いている(写真9)。

(三) 近世後期 天明〜慶応年間(一七八一〜一八六八)の遺構をみると、永平寺(福井)、総持寺(石川)両本山には法堂が残され、江戸時代の法堂再建と伽藍復興を繰り返す中で大きな変革を生み出している。永平寺では、後期の天明六年(一七八六)の回禄を受けて第五〇世玄透即中が入山し伽藍の復興を行ったが、天保四年(一八三三)に再び失われ、第五七世載庵禹隣が晋山すると道元五五〇回忌に合わせて復興が始められ、天保十四年(一八四三)に現在の法堂が建立された。しかし、寛政年間(一七八九〜

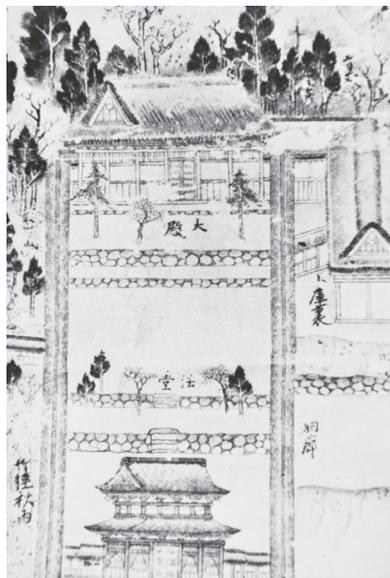


写真10 永平寺 古図（部分）

一八〇一）頃の伽藍古図には（写真10）、土間式の法堂（大殿）が描かれ、間取りは左右対称の前面土間六室型であったと見られ、後期に法堂の土間消失という変革が行われたことが分かる。また、総持寺では慶長二年（一五九七）の回祿後に法堂が再建され、正保三年（一六四六）、寛文三年（一六六三）に修理を受けるが、文化三年（一八〇六）の回祿までの二〇〇年余り、近世前期の姿を留めていたようである。この法堂（客殿）は寛保三年（一七四

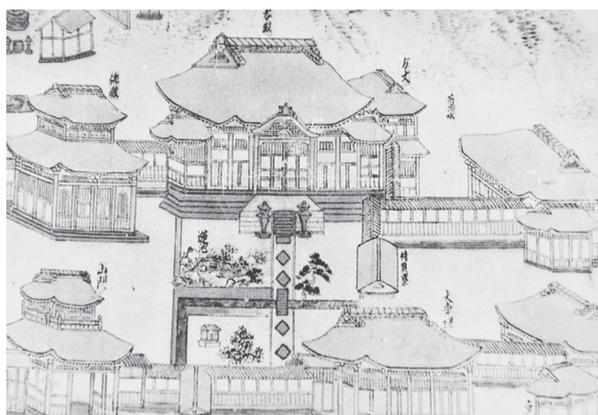


写真11 総持寺 古図（部分）

三）以前の古図によって知られ（写真11）、ここには正面中央に玄関を設けた左右対称の外観が描かれているので、前面土間六室型の法堂であったと考えられる。その後、文

化三年（一八〇六）と文政元年（二八一八）の罹災により法堂は失われ、天保二年（一八三二）に鶴見移転前の法堂が再建された。この法堂は横山秀哉博士の復元によれば玄関をもつ土間式の三列三室の九室構成の平面形式としてお

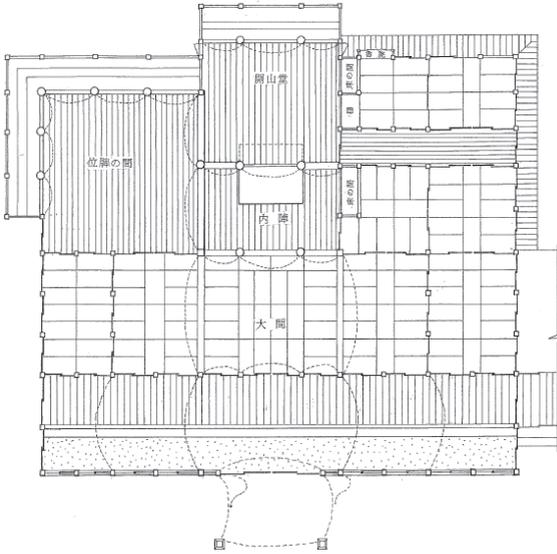


図6 源真寺本堂 復原平面図

近世の禅宗建築について（杉野）

り、後期に大きな変革が行われたとみられる。

次に、東海・甲信地方と全国の代表的な遺構一二五棟を一覧すると、前期・中期の伝統を破って、平面形式と内部空間・意匠に新たな発展を示している。その最大の変化は、曹洞宗本堂の四つの基本平面（前面土間八室型、前面土間六室型、広縁八室型、広縁六室型）に加えて、間口方向と奥行方向に平面を拡張し、それまでの二列四室、二列三室の八室構成と六室構成から二列五室の一〇室構成（大隣寺本堂〈福島〉・蕃松院本堂〈長野〉・円通寺〈兵庫〉）、三列三室の九室構成（常安寺本堂〈三重〉）、三列四室の一室構成（正安寺本堂〈長野〉）、三列五室の一五室構成（源真寺本堂〈長野〉）（図6）等を生み出し、平面形式の分化が行われている。また、前面土間を廃止して大縁と一体化させる傾向が現れており、その始まりは本堂の入口部分にのみ土間を残して両脇に床を張り、凹字型の大縁とするものが現れる。（正林寺本堂〈静岡〉）、さらに、前述の永平寺法堂のように大縁奥行を三間〜三間半に取り、三列三室の九室構成に相当するものが現れる（昌禅寺本堂〈長野〉）（図7）。このように、曹洞宗に左右対称の平面形式

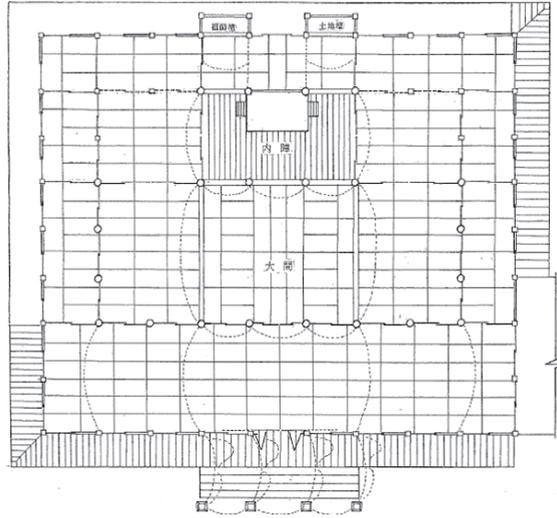


図7 昌禅寺本堂 復原平面図

が生み出されると外観にも変化が及び、それまで無かった向拝を設けるものが現れている（大中正本堂〈栃木〉・碩水寺本堂〈長野〉・常安寺本堂〈三重〉・源真寺本堂〈長野〉）。

本堂内部は、平面の分化に伴って大きな変化が生まれている。大間の内部空間は大きく変化し、この時期には前掲の永沢寺本堂のように大間と上の間・下の間境に大虹梁を渡し、三室一連の空間を造るものが総ての平面形式に現れている。その傾向は、天明・寛政年間（一七八一〜一八〇一）の遺構では、大間両脇に敷居・鴨居・内法長押を通して建具を入れるもの（雲龍寺本堂〈長野〉・満照寺本堂〈長野〉）と大間両脇に大虹梁を渡すもの（大昌院本堂〈長野〉）の二つの手法が用いられたが、文化・文政年間（一八〇四〜三〇）以降には大半の寺院において大間両脇に大虹梁が渡されており（長円寺本堂〈愛知〉・安樂寺本堂〈三重〉・龍泰寺本堂〈岐阜〉）等、この時期には大間・両脇室の三室を一連とする大空間と架構システムが全国的な傾向となったため、この大虹梁は近世後期の時代的な指標の一つになった。しかも、この大虹梁が他の室境にまで普及し、大間・内陣の内部空間の変容が一層大きな発展の要因となった。一方、開山堂・位牌堂は二つの機能を一つの空間に収めるものもあったが、大半が二つの建物に分離され、夫々が独立して機能を果たし、開山堂に丸柱、斗拱、

虹梁等の仏堂的な意匠が用いられるようになった。また、内陣と上奥・下奥の間の内部空間の発展は、信濃地方に顕著であった。信濃地方では早くから下奥の間を位牌の間としたため、中期末に内陣と位牌の間の境に大虹梁を渡すものがあつたが、後期には天明・寛政年間（一七八一〜一八〇一）の大昌寺本堂、長谷寺本堂等に見られ、文政・天保年間（一八一八〜四四）以降の碩水寺本堂、法善寺本堂等では、すでに位牌の間が大間、内陣に匹敵するほどの空間を獲得しており、内陣と位牌の間境に大虹梁を渡して一連の空間として両者を一体化させている。内陣では、前面に丸柱・斗栱・虹梁を用い、来迎柱・須弥壇を設け、周囲の柱上に斗栱を配し、格天井を張るものが一般的となり、大間両脇に大虹梁が渡されると内陣前面の両端柱を丸柱とするものが現れ、内陣の周囲に総て丸柱を用いるものも現れている。さらに、信濃地方では内陣後方に位牌堂・開山堂を建てるもの、下奥の間を位牌の間にするものの二つの形態があつたが、後者では内陣と位牌の間を一連に扱うようになり、前掲の源真寺本堂に見られたように、位牌の間の背面と側面（外側）にL字型の位牌壇を設け、柱上部に大

近世の禅宗建築について（杉野）

虹梁を渡し、内陣と位牌の間の意匠は仏堂化を一層推し進めている（図6）。また、後期には本堂の外部と内部空間に多くの彫刻を採用するようになる。こうした内部空間の発展は仏堂化の傾向の一端を反映したものともいえるが、江戸後期の建築界の動きが大きな影響を与えたとみられる。中でも、信濃の立川和四郎の一門は彫り物師として活躍し、東海・甲信地方の杜寺建築に影響を及ぼしており、曹洞宗本堂にも内部の彫刻欄間、彫刻入り斗栱、彫刻入り虹梁等にその傾向が認められ、そうした流行が取り入れられたとみられる。

八、まとめ

近世の禅宗建築は、本山の伽藍とともに地方末寺の建築を含めて見渡すことで、その全体像が明らかとなる。いずれも、中国の禅院の伽藍建築に由来し、鎌倉・京都の五山禅院の伽藍に引き継がれ、中世末から近世初期にかけて地方寺院では本山周辺の塔頭寺院の影響を受けることになった。近世の禅宗伽藍は、臨済宗では妙心寺、大徳寺、曹洞宗では永平寺、総持寺等の本山に継承され、地方寺院にお

近世の禅宗建築について（杉野）

いては臨済宗では塔頭寺院の境内の建築に倣って、山門、本堂（方丈）、庫裡、玄関、開山堂等からなる寺院構成が採用され、曹洞宗では格式ある専門道場等の寺院において、山門、本堂（客殿）、庫裡、禅堂、衆寮、回廊、位牌堂、開山堂等からなる曹洞宗伽藍が採用され、両宗の寺院構成には大きな違いが認められるようになる。また、近世の禅宗寺院では仏殿を建てる例は少なく、僅かに仏殿を残す寺院は、臨済宗では旧五山派の末寺に多く、中世の仏殿を継承したとみられ、曹洞宗では中本山格の寺院に限られ、本山と同様に曹洞宗伽藍の中央に建てるのが一般的であった。

一方、近世の地方寺院では全国各地に臨済・曹洞両宗本堂が造営され、臨済宗本堂では塔頭客殿の二列三室の六室構成の方丈形式を忠実に守り、曹洞宗本堂では方丈形式を基本としつつ、前面土間八室型、前面土間六室型など独自の平面形式を生み出した。そして、両宗本堂の内部空間は近世前期・中期を通して、其々の宗風を堅持しつつ発展を辿っており、近世臨済宗本堂では京都の塔頭客殿に見る簡潔で清楚な意匠を継承し、公案禅に相応しい空間を創り、

近世曹洞宗本堂では禅宗伽藍の仏殿と法堂の機能を兼ね備え、堂内に露地を通し、内陣に露柱を立てるなど、厳格な清規と行事規範を遵守するため、黙照禅に相応しい空間を創り出した。さらに、近世後期には両宗では中世の伝統を継承しつつ、近世の終焉と新たな時代に向け、禅宗本堂において平面拡大、空間の開放、仏堂化、壮麗化などの発展を示すようになった。禅における「形と心」の問題は大きなテーマとされるが、近世禅宗本堂の発展消長が近世の禅宗建築を俯瞰する一助となれば幸いである。

※本稿は、令和元年十月二十九日に愛知学院大学・禅研究所において「近世の禅宗建築について」と題する講演を行い、その概要を纏めたものである。

注

(1) 杉野丞『近世禅宗寺院の空間構成・意匠の発展』、中央公論美術出版、平成二八年二月。

(2) 関口欣也『江南禅院の源流、高麗の発展』関口欣也著作集二、中央公論美術出版、平成二四年二月。関口欣也『五山

と禪院』関口欣也著作集二、中央公論美術出版、平成二八年四月。

(3) 太田博太郎『社寺建築の研究 日本建築史論集Ⅲ』、岩波書店、一九八六年九月。

(4) 横山秀哉『禪宗建築の研究』私家版、学位論文、昭和三年三月。

(5) 荻須純道『妙心寺』東洋文化社、昭和五二年四月。

(6) 川上貢『禪院の建築』河原書店、昭和四三年一月。

(7) 鈴木泰山『禪宗の地方発展』吉川弘文館、昭和五八年三月、今枝愛真『禪宗の歴史』日本歴史新書(改訂増補版)、至文堂、平成元年四月。

(8) 『永平寺史(全二巻)上・下巻』永平寺史編纂、昭和五七年九月二九日刊。栗山泰音『總持寺史』大本山總持寺、昭和一三年三月。室峰梅逸編『總持寺史』大本山總持寺、昭和四〇年三月。